

沖縄の障害児教育の歴史と今

全障研沖縄支部

砂川喜洋

■戦前、戦中そして戦後1967年頃までの障害児教育

沖縄の障害児教育は1907年に読谷村渡慶次尋常小学校の校長自ら校長室で行った聾啞教育が最初とされています。身振り、手振りでの表現指導が中心だったようです。1921年に盲人高橋福治が那覇で私立沖縄訓盲院を開校したのが独立校の最初であり、1924年に田代清雄が建てた私立沖縄聾啞学校と続きます。ハンセン氏病児の教育は1937年。隔離施設の南静園（宮古島）と愛楽園（北島北部屋我地島）にそれぞれ、八重瀬学園と愛楽学園が開園されました。

県立盲聾啞学校の開校は、1943年。1923年に出示された勅令の「盲・聾分離」とは逆に既設の私立盲学校と私立聾啞学校を合併した形のものでした。所在地は私立時代の別々のままでそれぞれ盲部・聾部としていました。開校はしたもの戦況が悪化し、教育どころではなく、校庭は食糧増産のためのいも畑と化し、校舎は兵舎となりました。初等部児童は各家庭に引きとられ、中等部生は軍事工場や兵士のマッサージ奉仕に動員されました。1944年10月10日の那覇大空襲、その後1945年6月まで続いた激しい沖縄地上戦争で教育は中断されました。

終戦後も、米軍は沖縄を占領し続け、軍政府を立ち上げて軍の統制下に置きました。1952年4月28日の講和条

約により、沖縄県は日本から切り離され沖縄の施政権を日本政府は米国民政府に移しました。同年に沖縄教職員会（現在の沖縄県教職員組合の前身）が発足しています。

戦後、障害児教育が再開されたのは、ハンセン氏病児の療養所内教育が1947年と比較的早く、沖縄盲聾啞学校が再開されたのは1951年8月で、いずれも、福祉行政によるものでした。1954年の琉球政府移行期に教育行政に引き継がれ、ハンセン氏病児の八重瀬学園は稲沖小・中学校、愛楽学園は澄井小、中学校と校名も変更されました。療養所内児童・生徒の教育的措置は当時としては沖縄独自のもので、米国民政府布令として公布された「琉球教育法」が大きな力となっています。

1959年に盲聾啞学校が盲学校、聾学校と分離しましたが、隣接校でした。そのために寄宿舎は1974年5月まで盲聾寄宿舎として同居していました。知的障害児教育は、小学校が1958年、中学校が1962年、どちらも一校だけに特殊学級が設置されたことが先駆けで、その後、多くの小・中学校で特殊学級は増えていきました。肢体不自由児の教育は、1960年に那覇教育区立小学校及び中学校の分教場として、沖縄整肢療養園内に設置されたことが最初です。独立校として、琉球政府立養護学校が設置されたのは1965年、大平養護学校（知的障害児）と鏡ヶ丘養護学校（肢体不自由児）の二校です。そして、前記の整肢療養園内分教場は、1968年には鏡ヶ丘の分校

となり、その翌年には那覇養護学校として独立しました。

■風疹の大流行に伴う「風疹聴覚障害児」の保育・教育

1964年秋から1965年春にかけて沖縄全域に風疹が大流行しました。そして、1965年後半から1966年初めにかけて生まれた乳児から、多数の「風疹障害児」が発見され、社会問題となりました。「風疹障害児」のなかでも、とりわけ「聴覚障害児」が339名（他の障害児は35名）で最も多かったと報告されています。

「風疹による聴覚障害児を持つ親の会」が結成されたのは、1968年12月。次のような事項を行政や議会に強く要請行動しています。①沖縄聾学校幼稚部の定員増、②連合教育区単位の難聴学級（風疹児学級）の設置、③幼稚園対象児の3歳への引き下げ、④教員の増員、⑤予防接種の実施、⑥専門指導員の派遣要請などでした。

1969年には子どもたちが3歳になり、沖縄聾学校幼稚園や公立幼稚園でも早期教育が始まりました。入園前の1968年に行われた「母子講習会」や「教育相談」を沖縄聾学校が実施したことが「風疹聴覚障害児教育」の始まりです。日本政府も琉球政府の要請に応じて、1969年～70年に数次にわたり、40人余の指導員を派遣しています。1970年～71年には、本土及び沖縄聾学校の現場で40名余の担当教員を研修させるなどして、幼稚園教育充実と小学への入学に備えました。

その頃の親や教師向けの研修では、早期から補聴器を装着し、口話、読話を身につけたら小学校入学の頃には、健聴児並に発話による対話ができる。学校でも、家庭でも厳しく訓練すること、身振りや手話を使うと口話も読話も身につかず、健聴者との対話はできない、と言われ「起床時から就寝まで訓練づめ」という声も聞こえました。

1972年4月、風疹聴覚障害児は、県下44の小学校に設置された50余の「風疹児学級」と沖縄聾学校（4学級）

に入学しました。聴力レベル、発語、読話の力、親の意向などを踏まえて公立小の風疹児学級と、沖縄聾学校入学を分けたようですが、親が聾学校を敬遠したケースも多かったといえます。それは、幼稚園の頃に行政が「風疹聴覚障害」と「聾」を使い分け、「あなたのお子さんは『聾』ではありません。『風疹聴覚障害』です」と話していたというなどが影響していたと思われます。

6年の小学校課程を修了し、中学に進んだのは1978年、養護学校義務制施行の前年でした。その中学校段階の教育については、既存の沖縄聾学校の他に、新たな聾学校を増設して教育するか、それとも小学校と同じように中学校でも風疹児学級を設置して教育するかなど、「親の会」と行政間で議論がなされました。親側からは「かつて、この子たちは聾ではない、風疹聴覚障害だと言っていたのに、どうして聾学校を創るのですか」との意見が出て、行政側からは「原因が風疹で、結果は聾です」と説明する場面もあったといえます。結局、那覇地区だけは1校だけに「難聴学級を設置し、他は新設の北城聾学校の本校と離島の宮古・八重山両分校と沖縄聾学校で教育することになりました。北城聾学校は極めてまれな単学年聾学校でした。

高校段階に達したとき、高等部に認可替えをして継続し、那覇地区は、那覇市の援助で私立高校に難聴学級を設置し、進学させました。北城聾学校は6年で閉校となりました。他に、風疹聴覚障害児、生徒のかなりの者が、幼・小・中・高のそれぞれの段階で、通常学級に入級し、健聴児童・生徒とともに学んでもいました。

■その他の障害児教育

病弱・身体虚弱児の教育は、まず、結核児に対する教育が1964年に結核療養所近隣の糸満区立小学校及び中学校の特殊学級として療養所内に設置されました。その後、1967年に琉球政府立鏡ヶ丘養護学校兼城分校として移